

## 神護寺五大虚空蔵菩薩坐像再考

佐々木守俊（岡山大学）

承和 12 年（845）頃の完成と目される神護寺五大虚空蔵菩薩坐像は、お互いによく似た五尊を一具とする構成、強い正面性を示す静謐な像容から、金剛界系の曼荼羅を典拠に造像されたと考えられる。だが、典拠を具体的に挙げて図像写しの問題が議論されることはなかった。それは、中尊の法界虚空蔵像が右手第一・二指を捻ずる現状が、所依經典の『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』に「持宝」と規定される図像と異なり、例外的な存在とみなされてきたことが大きい。これに対し発表者は先行論文で、神護寺法界像は当初、右手で蓮華の茎を執り、華上に宝珠を乗せていたと推定するとともに、五尊すべての当初の図像が、宗叡請来の白描図像である『理趣經十八会曼荼羅』所収の五大虚空蔵像とほぼ一致することを指摘した。本図像は神護寺像の造立後に請来されたものだが、有茎の蓮華を執る法界像が唐に存在したことを示す根拠として看過できない。

新たに注目したいのは、神護寺像の当初の図像が、大覚寺に所蔵される 13 世紀の画像とも近似することである。大覚寺本は従来から、古い作品にもとづく可能性が指摘されてきた。『理趣經十八会曼荼羅』中の像は基本的な図像が一致するが、装身具の形状はより簡素であり、法界像の右手の形状も異なる。以上の点より、大覚寺本の祖本は他に求められねばならない。次に、神護寺本両界曼荼羅（高雄曼荼羅）に代表される、空海請来の現図両界曼荼羅と大覚寺本を比較すると、脇腹を強く絞ったプロポーション、紐飾りを垂下させた胸飾、雲形の飾りのついた臂釧、肩上で大きく波打ちながら広がる垂髪など、共通点が多い。こうした特徴は、やはり空海請来画像に基づいて描かれたと考察されている智積院本孔雀明王像とも共通する。これらの比較を通じ、大覚寺本の原本は空海の時代にさかのぼる可能性がじゅうぶんに考えられる。

空海は弘仁 12 年（821）、両界曼荼羅や東寺に現存する龍猛・龍智像などとともに、五大虚空蔵像を制作したことが『性靈集』所収の願文から知られる。作画期間中に空海は 3 年前に新鑄された富寿神宝 2 万銭を嵯峨天皇から施されていることから、この事業は鎮護国家を祈る、空海と嵯峨の緊密な連携の所産とみなされる。空海の活動の画期に描かれたこの画像、ないしは典拠となった唐の画像または図像は、大覚寺本のような本格的作品の祖本とみるにふさわしい。

神護寺像も大覚寺本と同様、弘仁 12 年制作の画像と図像を共有すると推察される。『日本三代実録』によれば、神護寺像安置の目的は鎮護国家だった。本像の造立に際し、国家的意思を担う弘仁 12 年本、または祖本の唐画を典拠とすることは必然的な選択だっただろう。小野玄妙氏は、弘仁 12 年の作画が神護寺でおこなわれた可能性を指摘する。これに従えば、神護寺という場において画像から彫像へと空海系の図像が継承され、鎮護国家が継続的に祈られていたことになる。最近、弘仁 12 年作画の「五忿怒尊」と東寺講堂五大明王像の関係が注目されている。神護寺像についても、空海の記憶をとどめる作例として、その存在意義を再認識したい。